

日本文学部会

【概要】

谷口幸代*

第11回国際日文学コンソーシアムの第一日目(2016年12月12日)に日本文学部会が開催された。統一テーマ「はたらく／あそぶ」のもと、大学院生の研究発表2本、提携校の教員による講演3本というプログラムであった。以下、登壇順に各発表・講演、並びに質疑応答の概要を報告する。

まず本学大学院博士後期課程に在籍する黄毓倫氏は「詩「小岩井農場」の「自由射手」^{フライシュツ}とウェーバーの歌劇《魔弾の射手》—宮沢賢治の「魔界」イメージをめぐる—」との題目で発表した。従来指摘にとどまっていた歌劇「魔弾の射手」との関係に着目することから「小岩井農場」の読み直しを図り、ドイツロマン派の森のイメージ、ヘッケルの個体発生説、バルクソンの『創造的進化』、仏教の十界互具を背景に、賢治の魔界認識が形成されたとの見方が提示された。質疑応答では、ロンドン大学バークベック・カレッジの阿南順子氏より、ドイツを経由してキリスト教と仏教の共通点に辿りついた回路のあり方について質問があった。それに対して、宗教に限らず、様々な領域にわたる知識の融合が賢治テキストの特徴であるとの回答があった。次に本学教員の塚常樹氏より、「自由射手」の「自由」の意味、魔王波旬と性欲との関係、ギリシャ神話のキューピッドの弓矢との関係等の検討が今後の課題として求められた。

続いて国立台湾大学院生の黄馨誼氏の発表は、「漱石と村上春樹の作品における女主人公の生き

方—『三四郎』の美禰子と『ノルウェイの森』の直子から見て—」という題目に示されているように、1908年に発表された夏目漱石の『三四郎』と1987年に発表された村上春樹の『ノルウェイの森』を取り上げ、理想と現実、逃避のありかたをめぐるそれぞれのヒロイン像を比較検討するものであった。質疑応答では、本学教員の宮下聡子氏より、『三四郎』に関しては、「我が罪は常に我が前にあり」と美禰子が旧約聖書の一節をつぶやく箇所があるが、彼女自身の「罪」の内実をめぐる先行研究への黄氏の立場と主張、並びにその論拠、また『ノルウェイの森』に関しては、直子の自殺の原因を独立した人格としての愛が実現されなかったことにあると読む可能性が問われた。これに対して、『三四郎』の場合は、唐突とも思える美禰子の結婚の理由を、教会へ行くシーンの解釈によって解明したかったという意図が述べられ、『ノルウェイの森』の愛の定義については今後の課題としたいとの回答がなされた。さらに本学大学院博士前期課程の王淵致氏より、『三四郎』におけるマーメイドの表象やエリートである野々宮との結婚の意味について質問が出され、美禰子と直子の願う理想について議論が交わされた。

続いて教員による講演に移り、まずカレル大学のヴェベル・ミハエル氏の「仕事でも遊べる—安岡章太郎とハシュク・ヤロスラフの短編小説における皮肉と風刺—」は、安岡章太郎とチェコの作家、ハシュク・ヤロスラフという異なる時代、文化、言語、社会背景のもとで執筆した二人の作家の共通点を探るものであった。両者の文学には

*お茶の水女子大学准教授

複数の共通点が見られるが、特に仕事と娯楽の混合というユニークな特徴があり、それが皮肉と諷刺を生むという構造になっていることに注意が喚起された。質疑応答では、本学大学院博士前期課程の山根可菜子氏より、両者の文学における皮肉や諷刺と仕事と娯楽の混合との関連について質問があった。古瀬奈津子比較日本学教育研究センター長からは、ヤロスラフの日本語訳の状況について質問があり、飯島周らによる日本語訳があることが紹介された。それを受けて司会がチェコにおける安岡の研究・翻訳状況へ話題を転じたところ、安岡作品のチェコ語訳は現時点でないとの回答が得られた。

続く国立台湾大学の范淑文氏の「主人公が演じた「働く」という行為—夏目漱石『門』・村上春樹『スプートニクの恋人』をめぐる—」は、『門』と『スプートニクの恋人』における労働の描かれ方について比較検討するものであった。『門』では、罪の償いとしての意味をもつ宗助の労働が語られておらず、それとは対照的に古道具屋と交渉したり障子を張り替えたりといった御米の労働が描かれていること、また『スプートニクの恋人』では就業体験によって変化を遂げるすみれの姿や経営者として働くミュウの姿が描かれていることなど、両作に対する新たな知見が示された。質疑応答では、大塚常樹氏より、御米の労働に着目することは新鮮な試みであるという発言があった他、『門』が高等遊民に、いっぽうの『スプートニクの恋人』がニートに各々関連する作品であるという講演の前提に関連して、高等遊民とニートの定義と両者を同じものとして扱うことの是非が問われた。これに対して、高等遊民とニートに違いはあったとしても、働かないことへの人間の心理に着眼するところから二つの作品を比較することにねらいがあったとの回答があった。

最後の阿南氏の「ネオリベラル日本における女の共同体—やなぎみわのヴィジュアル・アーツ作品を例に—」は、現代美術作家・やなぎみわの

『エレベーターガール』シリーズを取り上げ、豊富な画像を用いながらの講演であった。一見するとエレベーターという狭い空間に閉じ込められた女性の姿を表現したと思える作品が、実はネオリベラル社会で孤立した女性たちが集団化することを可能とする創造的な場として提示されており、かつ自己回復の場としての意味も持ち得ることが論じられた。質疑応答では、本学教員の松岡智之氏より、『エレベーターガール』の展示形式、やなぎのファン層、講演の構成について質問があった。これらの質問に対して、パフォーマンス作品として世に出された後、海外では写真集、日本ではポストカード集として出版され、ウェブサイト上でも発信されていること、ヨーロッパの童話を扱った作品があることから、いわゆる「ゴスロリ」のファン層と重なること、前半は現実のエレベーターガールを統計的なデータを用いて説明し、後半は作り上げられたファンタジー世界を分析する構成だったとの回答がなされた。また本学院生の王淵致氏の発言から男性の視線を想定した分析について話題になり、阿南氏から、作家自身は意識していないと思われるが、そうした視点の導入は興味深い解釈につながる可能性があるとの見解が示された。

以上のように、台湾、チェコ、イギリスから登壇者を迎え、非常に国際色豊かな部会となった。なお、黄毓倫氏は、国立台湾大学の院生として参加した2010年の第5回国際日本学コンソーシアムに続いて二度目の発表であり、本学に留学後に深められた賢治研究の成果報告の場になった。

内容的にも、扱う時代こそ残念ながら近現代に偏りがみられたが、多様な対象と多彩なアプローチ方法で、「はたらく／あそぶ」という行為が言語芸術や視覚芸術においてどのように表現されているのかという主題に迫る会であった。質疑応答でも、登壇者、本学のファカルティ、大学院生から重要な質問や意見が積極的に寄せられ、時間が足らなくなるほどの盛り上がりを見せた。